

巻頭言	田中典彦
刊行の御祝い	金道宗
中世遁世者にみる自己と世間	池見澄隆..... 9
——無住『雑談集』を中心に——	
現代社会における宗教の一役割	韓乃彰.....31
——仏教のマインドフルネス瞑想の心理治療的作用を中心に——	
日本における死者祭祀と仏教	八木透.....61
——民俗学の視座より——	
持続可能な生態社会のための仏教者の生命清規	柳淨拈.....91
近世の大蔵経刊行と宗存	馬場久幸.....115
仏教と戦争	元永常.....145
——浄土真宗戦時教学の構造分析を中心として——	
第23回国際仏教文化学術会議 総括	鄭舜日.....167
要旨 (英文・ハンゲル)	
執筆者紹介	
翻訳者紹介	

巻 頭 言

佛教大学学長

田 中 典 彦

国際仏教文化学術会議は1973年に韓国の圓光大学校と日本の佛教大学との間ではじめて開催されて以来、両大学において隔年制でおこなわれてきました。実に40年以上にわたってこの学術交流が継続されてきたことに敬意を表したいと思います。これも、この間両校において本学術会議に理解を示され、熱心に取り組んでこられた方々のお蔭であると改めて御礼申し上げます。そして今回、韓国・圓光大学校において第23回国際仏教文化学術会議が開催され、意義深い大会であったとの報告をいただきました。

さて先年100周年を迎えた佛教大学は、次の新たな100年に向かって「誓願」を立て、『佛大 Vision2022』を策定し、その具体化を目指して歩んでいるところであります。その中において、建学の理念である仏教精神に基づいて、今の時代に相応しい教育、研究を展開するための理念を「転識得智」（識を転じて智慧を得る）に定めたところであります。つまり、われわれが得てきた知識を人生のさまざまな場面において、今何をなすべきかを判断し、実行してゆける力、生きる力へと転換してゆくことこそが人間に求められていることであろうと考えるからであります。知識は生きる力へと転じられてこそ価値あるものとなるのです。

学問といわれるものもまたそうです。それが単に真実を求め知り得た

というだけでは知識であるに止まって、人類の福祉に貢献しうるものにはなりません。知り、解明された真実知が社会に生きる人びとの上に施され、それらが人びとの生きる力となってこそ人間の学問ということになります。学術会議の意義は、それぞれ研究者が究めてきた真実知を互いに理解し、議論し、そして社会へ還元してゆく営みの一歩であるところにあり、まさに布施行というべきでありましょう。

今回の学術会議は「仏教と社会」というテーマでおこなわれました。時宜を得たものであります。ますます混沌とした世界を迎えつつあると思われる中、まさに人間が新たな生きる道を求めねばならない時代になっていくことでしょう。個として生きながら、しかも社会に生きる人間のさまざまな問題の解決の糸口を仏教に求めることができるのは、共通して仏教に基盤をもつ文化を有する両国の学者諸氏なのであり、そこから新しい時代に向かって人間の生きる道を提唱できるのも、国を超えた相互理解と共生の実現によることとなるでしょう。

本書は圓光大学校で開催された第23回国際仏教文化学術会議の成果として、基調講演ならびに研究発表を収めたものであります。現代社会の諸問題に対する仏教の役割等について韓国と日本の研究者の方々によって、多方面から議論されたものであります。この成果が現代社会に生きる人びとの上に何らかの示唆あるものとなることを願いたします。

最後になりましたが、本書に貴重な稿をお寄せいただきました諸先生に心から感謝申し上げますとともに、この会議を成功裏に収められ、また本書の出版のためにご尽力いただきました、両国の関係者各位にあらためてお礼申し上げます。

刊行の御祝い

圓光大学校 總長

金 道 宗

韓国の圓光大学校と日本の佛教大学は、1973年から40年以上に亘って学術交流を続けてきた姉妹校です。その間、両大学間の学生の交換教育や交流、教員の交換授業、国際仏教文化学会議の開催などの交流事業は、両大学の発展はもちろん、社会的にも韓日両国の相互理解を深めることにおいて大きく貢献してきたと思います。

国際仏教文化学会議で論議してきた多様な主題の中には、「仏教の現代化方向」（第1回・第2回、1973・1974年）の問題を始め、「仏教と人間の問題」（第3回・第4回、1975・1976年）、「仏教と社会倫理」（第9回・第10回、1984・1986年）、「21世紀仏教の展望と課題」（第17回、2001年）、「現代社会の生命と霊性」（第20回、2007年）などがあります。このような議論は結局、今を生きている人びとに仏教が果たすべき役割を具体的に探して、それを実践する方法を提言するものであったと思います。つまり、仏教精神や圓仏教の精神を建学の理念としている両大学のアイデンティティーを再確認しながらも、両大学がその精神を持ってこの世に貢献するための方法を共同発掘してきた作業であったともいえます。

本書は、両大学が2014年に開催した第23回国際仏教文化学会議の成果をまとめたもので、主題は「仏教と社会」です。中世や近世、または

近代の仏教者はいかに社会と向き合い、時代の波のなかで社会共同体にどのような役割を果たしてきたのか。また現代社会の中で仏教が個人に提供できるサービスの具体的な事例にはどのようなものがあり、生態社会のために仏教者として実践すべき理念とは何かなどの問題が論議されています。これらのテーマは、前述のように今までの国際仏教文化学会議のなかで論議されてきた仏教の役割という問題意識を継承しつつ、今現在を生きる仏教者という自己認識に基づいていると思います。よりよい社会を造っていくための仏教者の提言であるともいえます。このような提言こそ、仏教精神と圓仏教精神を有する両大学が果たすべき社会的な役割かも知れません。

最後に、圓光大学校と佛教大学の交流のために、今まで最善を尽くしてくださった両大学の先輩たちの精神を継承しながら、両大学の友好のために努力していらっしゃる佛教大学の皆様に深い感謝の意を申し上げます。また、本書の出版のために苦勞した関係者の皆様や、貴重な論考を發表してくださった両大学の諸先生にもあらためてお礼を申し上げます。それから、本書ができるだけ多くの方々に読まれ、私たちの社会の発展に少しでも貢献できることをお祈りいたします。

第23回国際仏教文化学会議 総括

鄭 舜 日

日本の佛教大学と韓国の圓光大学が主催する国際仏教文化学会議が、いつのまにか23回目を数えることになった。この間、優れた先学の努力でこの会議が韓国と日本の学問の交流の場のみならず、両国国民の信頼を固める場としてその機能が拡張したことに無限の喜びを感じる。また今年、「仏教と社会」という主題の下で豊かな学术交流の場になり、よりいっそう深い喜びを感じる。発表の内容もまた個性豊かで、主題に相応しく社会の内面と外面の多様な問題を考えさせる意義深い論議であった。発表者の皆様に改めて感謝の意を表す。

まず、基調講演としての池見澄隆先生の「中世遁世者にみる自己と世間——無住『雑談集』を中心に——」は、アナル学派の研究方法を導入した日本中世の精神史の一面がうかがえる発表であった。この分野の第一人者でもある池見先生は、無住の内面世界を鋭い目線で考察しながら、近代の理性的な限界を越えた所にある人間の両面性に対する苦悩の記録を自己認識と世間感覚というプリズムに照らして、私的情念の学問的な価値を考察している。これは、長い時間の観察を通して徐々に変化して行く人間の観念に対する歴史を叙述することであり、高峰を占めている祖師の教えや高峻な教理からみる仏教の歴史とともに、民衆の生活を貫く内的歴史の側面を読み取る方法であるといえる。無住こそ、この

ような側面からは欠かせない貴重な素材を提供しており、池見先生は、遁世者が持っていた世間と出世間という心的な境界の状況を分析することで、中世の心性の歴史を忠実に再現している。仏教史研究の新たな地平を開いた力作であるといえる。

次に、韓国側の基調講演である韓乃彰先生の「現代社会における宗教の役割」（学術会議で発表した内容とこの本に載せた内容が多少異なり、この論評は前者に対するものである）からは、宗教固有の役割が、社会の多様な機能に移管されている現実において、宗教の現代的な役割を模索しているという点で示唆するところが多い。その核心的な内容は、伝統文化を保つ機能、個人の総合的な生活の質を高めること、普遍的な価値に基づいた社会的な正義の具現、正しい価値観の内面化作業を通じた社会化機能の遂行、資本主義によって破壊されていく生命と生態運動に対する関心を促す役割などである。

韓乃彰先生は、宗教が依然として社会のなかで多様な活動をしているとみる。しかしながら、過去には、組織的な宗教運動が政治化され、政治化された宗教は勢力に執着するようになり、勢力化した宗教は暴力集団に変わっていったことが歴史的にも明らかであるという。それにも関わらず、韓国社会はもちろん世界の現代社会において、多様な社会問題を解決していくには、すでに経験と準備された組織としての宗教が重要な役割を果たすという。特に仏教は、宗教以上の役割を社会に提供していると主張している。社会問題に対して宗教が役割を果たすべきという論及は、新しい問題ではないが、より社会科学的な方法で綿密に分析している点にこの発表の意義がある。

研究発表としては、日本と韓国からそれぞれ二名の学者が発表した。民俗学、仏教の社会的役割、大蔵経の刊行、仏教の戦争責任などの時宜にかなった論文発表であった。

まず、八木透先生の「日本における死者祭祀と仏教——民俗学の視座より——」は、死者祭祀の諸相と、死霊から祖霊への変化過程を通じて仏教と民俗の関係を考察している。日本のなかで近代民俗学体系から外された仏教民俗学の領域がたゆまずに拡張していくことは喜ばしいことであろう。八木先生による最近の研究傾向はこれを明確に現している。民俗学と仏教との関係を多様な角度から考察し、論を立てる研究者の努力は日本の仏教学をより豊かにしていると思う。

「喪」と「忌」を通じた遺族の慣習や死者祭祀と葬送儀礼は、仏教を通じて日本人の死者に対する慣習の特徴を明確に現している。民俗と仏教の結合は、民俗の伝統の上に仏教の宗教的役割が加わった形ではないかと思う。たとえば、あの世と他界観において仏教の浄土信仰が結合したことは、日本仏教の土着化過程と密接に関連していることがわかる。生者と死者に対する仏教の治癒の役割が、長い歴史のなかで形成されて来た日本民俗のなかで、治癒の形態として習合されているという発表者の報告は、仏教民俗学に対するより高い期待感を持たせるに充分であった。

韓国仏教界の代表的な社会団体である浄土会で長く活動して来た柳淨拈先生の「持続可能な生態社会のための仏教者の生命清規^{しんぎ}」は、発表者本人の経験が隅々まで滲んでいる発表であるといえよう。論理的な研究ではなく、現場で直接感じながら、仏教の現代的な役割がどのようなものであるべきかについての、筆者の長い苦悩の結果であるという点で意義深い。柳淨拈先生は、その核心を仏教者が守るべき生命清規として著わし、のちの世代に伝えるべき地球的次元の生活倫理を提唱している。

この清規は、8分野にわたって24項目に分けられている。出家者のための伝統的な四分律と比べるとその数が少ないが、在家の五戒や十戒と比べると多い方である。しかし、この清規は、戒律に含まれている道徳

的な強制性よりは自律的で、また実質的であり、他人と地球の未来を考えれば、仏教者のみならずすべての人類が^{ていげんめいほう}定言命法の立場で無条件に守るべき生活の指導原理のようなものであることがわかる。仏教はもちろん、すべての宗教、文学、哲学、歴史などの諸人文学が、もし現実問題に対して何らかの代案を提示するのであれば、このような形のものではないかと思う。また清規の内容を見れば、仏教の歴史と文化、そして宗教と哲学としての仏教の教えがそのまま染み込んでいることがわかる。

次に、日本の大蔵経刊行の重要な歴史的意義を報告した馬場久幸先生の「近世の大蔵経刊行と宗存」という研究である。大蔵経刊行は、その時代の文化的力量であるともいえるほど多くの努力が必要な大事業である。過去の中国、韓国、契丹などの大蔵経刊行を見てもそのような事情がわかる。馬場先生の発表では、天海版大蔵経の刊行以前にあった、宗存の大蔵経刊行（ただし未完である）の全貌と日本国内の大蔵経刊行の高い水準について論究している。特に、馬場先生は宗存が高麗大蔵経を底本にすることで、のちにまで諸宗の基本としようとした意図を巧みに解明している。また、大蔵経刊行に必要な費用の節約のための努力があったにも関わらず、当時の社会国家的な状況の影響で刊行が未完になったことを明らかにしている。しかし、宗存が自分が生きていた混乱の時代に仏法を広めようとして、大蔵経の刊行を発願したその精神は高く評価すべきであろう。また、今後このような研究が盛んになり、東アジアの大蔵経刊行の貴重な歴史が妥当な学問的評価を受けることを期待する。

最後に、元永常先生の「仏教と戦争——浄土真宗戦時教学の構造分析を中心として——」は、仏教の軍国主義を告発している研究であると思う。ある人は仏教が戦争を促したことや参加したことはないという。しかし歴史を見れば、そうではないことが証明される。元永常先生による

今回の発表は、日本近代の仏教史もまたそうであったことを明らかにしている。

日本の戦時教学からは、日本内でもすでに歪曲された仏教教義が跋行していた様子がうかがえる。元永常先生は、これに対する最近の研究史を踏まえながら、今後の研究方向を摘示すると同時に、その研究の一端を浄土真宗の戦時教学の構造を通じて提示している。本研究は、日本の過去を懺悔すると同時に、古代からの伝統的なアジア仏教界の互惠平等の原則を固守するための意義深い努力であると思う。また今後、より綿密な仏教と国家の関係を新たに定立していく重要な研究であると思う。

伝統のある国際仏教文化学会議は、毎回、このように高い水準の研究成果を報告する場になっている。今後、韓国と日本両国の仏教学界を超えて、アジア全体に拡大される未来志向的な学術大会に発展することを期待する。

執筆者紹介（収録順）

①生年・出身地 ②最終学歴 ③職歴 ④主な著書

池 見 澄 隆（いけみ ちょうりゅう）

- ①1941年福井県生。
- ②大谷大学大学院博士課程単位取得。博士（文学・東北大学）。中世思想史。
- ③佛教大学名誉教授。
- ④『増補改訂版 中世の精神世界——死と救済——』（人文書院，1997年），『慚愧の精神史——「もうひとつの恥」の構造と展開』（思文閣出版，2004年），『冥顕論——日本人の精神史——』（編著，法藏館，2012年）。

韓 乃 彰（한내창／Han Nae Chang）

- ①1955年韓国・忠清南道大徳郡生。
- ②University of Iowa, Ph. D. Sociology, Organization.
- ③圓光大学校教授，Director of the Institute of Mind Humanities（마움（마음）人文学研究所所長）。
- ④『地域社会と福祉問題』（共著，圖書出版月山，1995年），『圓佛教人物斗思想（II）』（共著，圓佛教思想研究院，2001年），『韓國の宗教と社会運動』（共著，理學社，2010年），『韓國近代100年と社会変動と宗教的対応』（共著，韓國学術情報，2013年），『私たち，このまま遊ばせてください』（共著，圖書共同体，2013年），『韓國の宗教社会学』（共著，ヌルボム（늘봄），2013年）など。

八 木 透（やぎ とおる）

- ①1955年京都府生。
- ②佛教大学大学院文学研究科日本史学専攻博士後期課程単位取得。博士（文学・佛教大学）。
- ③佛教大学歴史学部教授。
- ④『男と女の民俗誌』（吉川弘文館，2008年），『新・民俗学を学ぶ』（編著，昭和堂，2013年），『京のまつりと祈り』（昭和堂，2015年）。

柳 淨 拈（유정길／Ryoo Jung Gil）

- ①1960年韓国・京畿道安城生。
- ②国民大学校建築学科卒業。
- ③知恵共有協同組合理事長，浄土会 エコーブッダ（Eco-Buddha）理事。
- ④『生態社会と緑色仏教』（美しい因縁，2013年，仏教出版賞受賞），『消費者はどのようにオーガニックをだめしているのか』（ホウレン草，2014年），『東アジアの平和共同』

体の構築と宗教の役割」(2011IPCR 国際セミナー2011, 2012年), 「仏教の生態的知恵と環境」(宗教団体環境政策実践協議会, 2010年) など.

馬場久幸(ばば ひさゆき)

- ①1971年京都府生.
- ②圓光大学校大学院(仏教学). 哲学博士.
- ③佛教大学非常勤講師.
- ④「日本 大谷大學 소장 高麗大藏經의 傳來의 特徴」(国立文化財研究所編『海外典籍文化財調査目録 日本 大谷大學 所藏 高麗大藏經』, 2008年), 「日本における高麗版大藏經の受容——足利氏を中心として——」(『福原隆善先生古稀記念論集 佛法僧論集』2巻, 山喜房佛書林, 2013年), 「『高麗再雕大藏經』の日本流通と活用——琉球王国を中心として——」(『石堂論叢』58, 2014年).

元永常(원영상/Won Yong Sang)

- ①1965年韓国・江原道横城生.
- ②佛教大学, 文学博士, 日本仏教思想および歴史専攻.
- ③圓光大学校研究教授, 韓国日本仏教文化学会会長.
- ④『日本文化事典』(共著, 高麗大学日本研究センター編, 2010年), 『東アジア仏教の近代的変容』(共著, 東国大学校出版局, 2010年), 『仏教と国家権力: 葛藤と相生』(共著, 曹溪宗出版社, 2010年), 『アジア仏教伝統の継承と転換』(共著, 東国大学校出版局, 2011年), 「浄土教の臨終論考察——臨終行儀を中心として——」(『浄土学研究』18輯, 韓国浄土学会, 2012年), 「韓国学界の日本仏教研究動向」(『韓国仏教学』68輯, 韓国仏教学会, 2013年) など.

鄭舜日(정순일/Jeong Sun Il)

- ①1953年韓国・全羅北道金堤生.
- ②円光大学校, 哲学博士, 中国仏教専攻.
- ③円光大学校教授, 韓国礼茶学研究所長.
- ④『説法の理論と実際』(民族社, 1998年), 『印度仏教思想史』(雲住寺, 2005年), 『今日は仏がない』(円仏教新聞社, 2008年), 『説法の技術』(民族社, 2008年), 『印度仏教史: その思想的理解』(雲住寺, 2010年) など, 翻訳書: 『中国仏教史』(鎌田茂雄著, 経書院, 1985年), 『中国仏教の思想』(玉城康四郎等著, 民族社, 1989年), 『中国喫茶文化史』(布目潮瀟著, 東国大学校出版局, 2012年) など.

翻訳者紹介

全 炳 昊 (전병호/Jeon, Byungho)

①1972年大韓民国生.

②佛教大学大学院社会学研究科社会学専攻博士後期課程修了. 博士 (社会学).

③佛教大学非常勤講師.

④「開化期における韓国社会の教育観と近代学校の形成過程」(『佛教大学大学院紀要』36号, 佛教大学, 2008年), 「非行抑止要因に関する日韓比較研究」(社会安全研究財団研究助成報告論文, 2009年), 「韓国大学生の自己観念と規範意識」(『現代の社会病理』30号, 日本社会病理学会, 2015年).